第４回滋賀県観光事業審議会　議事概要

１　開催日時、場所

令和２年７月20日（月）　10:00～12:00

滋賀県危機管理センター大会議室

２　出席委員（敬称略、五十音順）

〇委員：石川　亮、　伊吹　惠鐘、　岩田　春美、　金子　博美、　川口　洋美、
近藤　直人、　佐藤　泉、　羽田　真樹子、　人見　能暢、　廣岡　裕一、
道又　隆弘、　宮川　鎌次、　宮川　富子、　吉田　満梨、　渡　正美

〇オブザーバー：北川　宏、西川　直治

３　議事等

〇 森中商工観光労働部長挨拶

〇 新委員の紹介

〇 定足数の確認

議題１　「コロナとのつきあい方滋賀プラン」を踏まえた観光振興について

〇 事務局より資料２、資料３、資料４について説明があった。

（会長）

〇今説明のあった、「コロナとのつきあい方滋賀プラン」を踏まえた観光振興ついてご意見、ご質問を伺いたい。

事業者の方は、コロナによる事業活動への影響を含めて情報共有いただければ。

特に今の説明への補足するような内容の意見からいただければと思う。

（委員）

〇日本旅行業協会としては、先ほども触れられた、「Go To トラベル事業」が滋賀県だけでなく全国的に対応していき、窮状を訴えておられる観光業界の方々への支援となればと思い進めている。東京都以外については政治的な判断もあり、今このような状況となっていることはご承知の通りだと思う。コロナとの付き合い方に関しては、日本全国旅行業界、旅館組合、バス業界、各 JR、航空会社、それぞれがガイドラインを作成し、そのガイド

ラインに基づいた行動をとってもらうというご案内を業界全体で進めながら、滋賀県のほうでも記載していただいている。どのようにコロナと付き合いながら、「with コロナ」での観光振興を深めていこうという取り組みもしている。
そういった取り組みのほかに、お客様の反応について今日はお伝えしたい。東京の数字が変化するまでは、一定程度マーケットの反応を見ると非常に好意的に受け止められていた。しかし、「Go To トラベル事業」が7月22日からとなり、東京の感染者数が増え始めたこともあり、お客様の中で二の足を踏んでおられる方も見受けられる。「Go To トラベル事業」の申し込みについては既に始まっているが、お客様からの申し込みについては対前年に近い数字で伸びている。場所によっては対前年度比100%を超えているところもある。今後は実際に旅をされる7月22日以降に、それぞれ受け入れ側で必要な対策をとって、その場所がクラスターとならないように準備を進めていかなければならないと考えている。状況を含めて報告させていただいた。

（委員）
○日本旅行業協会の委員からお話があったように、当社も「Go To トラベル事業」に関して世の中の動きを注視している。一方で、JR西日本の7月上旬までの状況をお話しさせていただくと、近郊でのご利用が前年度比 70%ほど、平日が 70%で休日は 60%くらい。滋賀県に一番近いターミナルの京都駅では、これまでインバウンドの利用が非常に大きかったため、先ほどの数字からさらに10%ほど少ない利用率が続いている。緊急事態宣言が解除されてから、回復傾向がみられたが最近は頭打ち状態となっている。東京、大阪でコロナの感染が徐々に増えてきているということで、お客様は様子を見ているものと捉えている。
当社としては、車内換気や抗菌をはじめとしてしっかりとしたハード対策を進めるとともに、時間帯別の列車混雑状況の案内、窓口を介さないで列車をご利用いただくためのネット予約、ICカード（ICOCA）のご利用を促進する施策を展開している。加えて、まずは近場からご利用いただけるようなお出かけ情報やハイキング等を含めて外に出ませんかというようなご紹介をさせていただいている。この後、すぐには難しいだろうが、時期を見てお客様により遠くにお出かけいただけるか、引き続き社会の動向を注視していきたい。

（委員）
○私がこの場でお伝えできることは情報共有となるが、お伝えさせていただく。長浜も年間黒壁スクエアを中心に200万人のお客様に来ていただいているが、3月から少しずつお客

様が減り始め、対前年度比 60%となった。4 月は対前年度比 20%となっている状況。長く続いていた、長浜の曳山祭りも秋に延期、その他のイベントも中止になっている状況。黒壁が平成元年にオープンしてからこのようなことは初めてで、この度 4 月 16 日から 5 月 20 日までの間の約 1 カ月の間、直営店舗全館を休業するという事態になった。町の方々からは、「黒壁ができる前の昭和の時代に戻ったよう」との声もあり、人が 1 人も歩いてない状況を目の当たりにして、私たちみんなで危機感を感じていた。再開に当たり、いまだ定休日を設ける店舗や、時短営業をしながらの運営をしている店舗もある。商売をされている方だけではなく商店街の住民の方もおられるので、直営館の再開に当たり、約 200 軒の住民の方や商店主の方々にご挨拶させていただき、再開するということをご説明させていただいた。ほとんどの方から励ましの言葉をいただき、私たちの知らない時代のお話などをお聞きすることもできた。

営業していくことと、安全安心を確保していくことのバランスがとても難しく、各店舗で消毒液の設置やマスクの着用などをしているが、目に見えないものと共存していくことは難しいと感じている。特に黒壁ではガラスの体験教室もやっており、体験教室に参加したお客様には長く滞在していただくことになり、近くでインストラクターが指導させていただくこともある。席数を間引いたりすることで対応はしているが、今のところこのような状況がいつまで続くか不安を抱えながら営業している状態。今、徐々にお客様は増えつつあるが、平日はまだまだ少なく、土日にお客様が来ていただいているような状態。お客様から頂くお問い合わせの中には、「お客様が多かったらやめようかな」といった声もあり、そういったことも踏まえると、まだまだ注意していく状況かなと感じる。

（委員）

○当社のお客様は海外の方だけなので、12 月に中国でコロナが話題となってからは、アジア圏からのお客様は当社にはいらっしゃらないので大丈夫かなと思っていた。しかしだんだん雲行きが怪しくなってきて、1 月に入るとキャンセルが発生して来た。最初は日本が大丈夫かという感じであったが、そのうち欧米のお客様がお住まいの各地域の方がひどい状況なってしまい現在に至っている。2 月には 4 月のツアーは全部キャンセルになって、その後 5 月のツアーも全てキャンセルとなっている。9 月分の予約については、まだ来たいという方が残ってはいるが、いずれキャンセルになると思っている。当社の年内のツアーはもう絶望的かなと思っている。各旅行業者さんも頑張っていて、来年の 4 月、5 月に持ち越して延期していただいているお客様もいらっしゃる。社内でも来年頑張ろうという風に会話している。

私の中で１つ懸念しているのは、どんなにこちらでコロナへの対策をしても、100％万全の対策かと問われたら自信がない点だ。職場内感染を起こさないことと、起きた時にどうするかを考えるが、やっぱり 100％大丈夫とは言い難く、小さな事業者としてはこれからどうしていこうかとまだまだ不安を抱えている状態だ。また私たちのツアーで提供しているのは高齢者の方と一緒に地域の農村、文化、生活の体験ということなので、ツアーを提供する私達の内部からも不安だという声がある。さらに、観光地を巡るようなツアーではなく、生活エリアでのツアーなので、そこに外国人旅行客に戻ってきてほしいかといわれると、決してそうではないと思っている地域の方も多いと思う。そういう抱えてしまった恐怖感をどうやって緩和していくのかが大きな課題。

そんな中で、例えばこういうのがあったらいいなと思うのが、主要な駅や公共施設では入り口で検温をしていただければ助かる。もちろんこちらでも対策は実施するが、旅行者の方への啓発ももう少ししていただければなと思う。取り急ぎ今の状況報告。

（委員）

○宿泊施設の状況についてお伝えしたい。ご存じの通り、宿泊施設はかなりの件数が何か月間も休業していた。ようやく６月くらいから再開し始めたが、実際はまだ多くのお客様にお越しいただいているわけではない。土日祝日には少し戻ってきているかなという実感。来週の連休を含めた「Go To トラベル事業」にかなり期待を寄せていたところだが、日々状況が変わりその雲行きもかなり怪しくなっている。「Go To トラベル事業」に関しては、すぐ来ていただくというよりは予約を開始できるということなので、施設側は感染症対策をしてお客様もマナーを守ってくだされば世論の皆さんがおっしゃるように怖がることではないのではないかと私たちは思っている。印象として丁寧な説明ができていないということや、誤解もあって、前向きにはとらえていただけていないのが残念なところ。

宿泊施設としては、先ほどもあったように、感染症対象対策等補助金も活用して感染症対策を進めている。感染が日を追って増えてきているので、当初の予定よりさらにいろいろと設備などを揃えていっているところで、お客様がお越しいただいていないうちからさらに対策を実施していっている状況。

「あと宿」という宿泊施設前払いをお客様にしていただくことも県に後押しをしていただいた。これに関しては、かなりの人気で５分かからずに完売したと聞いているが、絶対数が少なく、早い者勝ちの様な感じになっていた。もう少し多くのお客様にも利用していただけるように考えていただければ県民の皆様にも喜んでもらえるのでは。

先ほどの議事にもあったが ８ 月下旬からのバスツアー補助事業に関して、バスへの対策もありがたい。個人のお客様はリピーターの方を中心に戻ってきていただいている状況

だが、やはりバスを使っての大人数のお客様はキャンセルされたままとなっている。修学旅行に関しては、春に予定されていたものが秋に振り替えられ、今はそれをもう 1 度見直す動きも出てきている。宿泊施設側は、対策もしているので、滋賀県に来ていただいて心配な状況はないと認識している。

滋賀県は少々自虐的にはなるが、三密になるような観光地ではなく、安心安全でのびのびと楽しんでもらえるということをアピールできる。実際に、自粛期間中にこもっておられた方が滋賀県にこられて気持ちが豊かになったという声も聞いている。そういった気持ちの面からもアピールしていければ。

（委員）

○社会人として旅行する立場の話をさせていただく。私は会社から 3 月と 7 月に、今後の過ごし方についてのガイドラインが示された。その中には、「旅行は極力控えて欲しい」、「社内での会食も極力控えて欲しい」、「入社式や歓送迎会も行わない」ということが書かれていた。個人や家族の中では、旅行に行ってもいいだろうと考えていても、他人の目がある。一緒に旅行する相手が同じ会社の人や社会人の友達であれば、誘うことすらためらわれる状態。友人から、「こんな時に誘ってくるなんて」とも思われたくない。また、誘われてもどう答えていいかわからない。今までは実際に行くことや買い物することが旅行だったが、旅行からレベルを下げて「お出かけ」という言い換えをするだけでも違うのかもしれない。個人的には、社会的に見てもまだ旅行するような状況になっていないように感じる。

滋賀県は、統計的にお出かけが好きな県民性で、IT の普及率が高く、スマホ、光ファイバーの普及率も高い。事業者の中にはオンラインや予約システムを活用できないような所もある。YouTube が有効と思っても、どうやって作るのか、どうやって字幕を入れるのかなど、そういうことがわからない事業者をサポートできるようなものが今はまだ必要なのではないか。

実際に行くことも大事だが、行きたくてもいけない、国内旅行も今年の春までは行けたのに今は無理。今までと考え方を変えないと厳しいのかなと。私も個人的にすごく旅行に行きたいと思っている。3 月と 5 月の海外旅行の予定や東京に遊びに行く予定も 2 回キャンセルしている。まだ現時点で、今なら旅行に行っても良いという後押しが全然ないような気がする。行っていいものかどうかの判断が社会人としてつかない。

JR がすごく空いていると感じるし、家で自粛中の人は今何をしているのだろうと思う。ネットでテレビを見たりすることが増えているので、観光としてはそこをチャンスにしないといけないと思う。

（委員）

○先ほど言いそびれたので補足させていただくと、【資料 2】のところでワーケーションという言葉が出てきたが、今は国の方でもワーケーションを推奨しておられる。まさに滋賀県は適地ではないかと思っている。ワーケーションは「Work」と「Vacation」という言葉の造語で、ご家族やグループ等で旅先やお出かけ先でお仕事をしながら休暇を楽しむもの。例えばご家族のお父さん若しくはお母さんが、旅先でテレワークを活用されている間に、子供たちがレジャーなりスポーツなり体験されて、夕食はご家族皆さんご一緒にされるというもの。これは滋賀県ではいろんな場所で実施しやすいのではないか。学校でもオンライン授業が増えており、実際に学校に通わなくても授業を受けられるようなことになれば、子供も平日にお出かけ先で授業を受けることができる。そうなればご家族と平日に滋賀県で旅行したり温泉に入ったりできる。そういう観点からも滋賀県がアピールできるのではないかと思う。

（委員）

○観光に関して今は逆に滋賀県のもっといいところを沢山出していくチャンスではないかと思っている。琵琶湖を真ん中に挟んで地域が離れていることが滋賀県の特徴であり、大津、草津ではクラスターも発生したが、県内周辺に関しては爆発的に感染者が出ていない。これは琵琶湖、地形のおかげではないかと思っている。流通の面についても滋賀県は分断されて、経済的にも分かれているところもある。

ワーケーションということに関しては、滋賀県の良いところ、環境の良いところをもっと生かしていって、企業側として有効に活用をしていけば良いかなと思う。

話は変わるが、観光に関して若い人の意見を聞くと、アウトドアの様な郊外型のバケーションの過ごし方、例えばキャンピングカーやオートキャンプ場などが人気。そこに関して調査すると、設備が十分に整っているところが少ない。そういったところをもっと充実させて、来てくださる人を増やすことが有効ではないかと思っている。今までそういったところに人が集中していなかった為、最初に感染が拡大したときにオートキャンプ場などが密になり、危険になった事例もある。その辺はきっちりと整備して、ルールを決めて誘致をするということを考えてはどうかと考えている。滋賀県は安全安心ですということをどんな風に打ち出すかが重要ではないかと考えている。

（会長）

○では一旦この議題については以上とし、次の議題に移りたいと思う。

では次の議題、『「健康しが」ツーリズムビジョン 2022』改定の１年前倒について、事務

局から説明をお願いする。

議題２　『「健康しが」ツーリズムビジョン 2022』について

〇 事務局より資料 5 および資料 6 について説明があった。

（会長）

〇この議題に関しては、『「健康しが」ツーリズムビジョン 2022』の改定を 1 年前倒しするという提案であった。前倒しすることについてまずご意見やご質問をいただければ。
特にこの前倒しについて、異議のある方はご意見いただければ。

（委員）

〇ツーリズムビジョンの前倒しに関する件について、もう少しだけ伺いたい。ビジョン改定はコロナ危機を迎えて、これまでの考え方で観光を進めていくことは難しいということから、前倒しすると捉えて良いのか。コロナ禍で社会課題や考える内容が増えており、これまでの価値観や物の考え方ではいろんな物事を進めていくことは難しくなっている。前倒しでビジョンを改定ということは、難しい中ある意味腹をくくって様々なことに対応していくという意味として捉えていいのか。事務局への質問である。

（事務局）

〇委員がおっしゃったとおり、これまでの価値観、物の考え方で進めていくことは難しいと認識している。これまでのビジョン、観光振興の考え方は、どちらかといえば量を求めていた。「観光客数 6000 万人を目指す」といったような質を保ちながら量を追い求めてきたところがあった。今は三密を避けなければならない、ソーシャルディスタンスを求められる中で、量を求めることが難しくなっていく。観光振興において量を求めていかないとなるとビジネスとしてどうなのか、難しいところはあると思う。そういった中で、観光消費額、単価を上げていきながら質を向上させていくことで、なるべく長く滞在してもらう。また、色んな事を体験していただけるような体験滞在型で滋賀県ならではの地域に根付いた文化、生活などを体験していただけるような形の新しい観光が作れないか、事務局の中で議論している。まだ明確な方針があるわけではないが、今後幅広く皆さんの意見をお聞きしながら滋賀県らしいツーリズムを考えていきたい。いずれにしても今のままのビジョンを続けていくことは難しいのではないかと考えている。短期的にはコロナと付き合いながらの観光を進めていきながら、中長期的には腰を据えていくためのビジョンの見直しが必要であると考えているところ。

（委員）

○今すぐにビジョンをどうにかすることは難しいと理解した。また、中長期的に考えていかなければいけないと伺った。中長期的に考えることとビジョンの開始が 1 年早まるということには少し矛盾を感じる。もう少し考えるべきこと、足元を見ていくべきこともあると思うし、この委員会でもう少ししっかり根っこのところを考えるべきではないかとも思う。

この中でも私の立ち位置は、観光客の立ち位置に近いと思う。大学は今どうなっているかと言うと、うちの大学はマンモス大学ではなく、美術大学であるので、一部対面授業を行っている。特に私の専門領域は、地域に出ていくようなものなので、細心の注意を学生と払いながら、先方と連絡を取り合いながら少しずつ動き出している。何が起こっているかというと、学生も私もソーシャルディスタンスを取る生活に対して慣れていないので、準備不足や失敗を日々、動きながら気づいている状態。ソーシャルディスタンスを慣れていくことが大事だと考えている。色んな経験をしていくうえで、新しい知識が今後どんどん入っていく。まずは日常の生活スタイルを皆で共有していくということが必要ではないかと考える。そういったことをこのビジョンの中に入れていけばどうかと思う。今日の議題の中にも、どのように旅行客に対応、準備をしてもらうかはしっかりと書かれていたかと思う。滋賀県独自のソーシャルディスタンスの在り方が常に更新されていきながら、何を重要視するのかということを次のビジョンの中にしっかりと入れ込んでいければ良い。

（事務局）

○おっしゃる通り、まだコロナとの付き合い方、対応の仕方については正解が定まっていない。色んな経験を積み上げていきながら、それでも右に左に揺れていくことが続くのではないかと我々も思っている。冒頭でお示しできていなかったが、「コロナとの付き合い方滋賀プラン」という、滋賀県全体でのコロナとの付き合い方のプランがあり、まさにこれも色々な時々の状況によって対応を柔軟に変えて行こうというものである。

【議題１】のコロナと付き合いながらの観光振興についてでは、コロナと付き合いながらの観光を、色んなことを試しながら、経験しながら場合によっては見直したりバージョンアップしたりしていく。引き続き皆様と議論しながら進めていければと考えている。

【議題２】のビジョンの改定の前倒しについては、できれば今年度末までに骨子案まで作れればと申したが、確かにまだコロナが落ち着いてない。また、まったく別の事態が起こることも考えられる。もしそういったことがあれば柔軟に対応していきたい。

今のところはまずはコロナと付き合いながらの観光振興を動かしながら、経験を積み上

げながらビジョンの改定にもつなげていきたい。ビジョンの改定は、6000 万人という目標を掲げたままにしておくことは適切でないという思いもあったので、この機会に改定を提案させていただいた。
内情をご紹介すると、事務局のなかでも、今年度中に上書き修正のような形で、今のビジョンの周期を変えずに修正するという意見もあった。ただ、「それはさすがに拙速すぎるのではないか」、「もう少し腰を据えて考える必要がある」という意見も多かった。しかし、「あまり先延ばしにして何もやらないわけにはいかない」という意見もあり、その折衷案のような形になるかもしれないが、ビジョンの改定を 1 年前倒しという形で検討してはどうかということになった。

（委員）
○了解した。事務局の内情もお聞かせいただけたし、より緊張感を持ちながらよりスピーディーにそしてより柔軟に振興を進めていくということだと理解した。より一層力を入れていくとも聞こえたし、頑張っていただきたい。我々も何かご協力できることがあれば協力体制をとっていきたい。

（委員）
○ビジョンの改定に関しては異議なし。「ツーリズムビジョン 2022」、「基本戦略」については全く間違っていないと思う。これこそ今大事にしなければならないことで、コロナを見据えた戦略で、「健康しが」ならではの観光、おもてなしである。おもてなしとはまさに「コロナとともに」＝「with」ということで、言葉を換えれば三方よしであると思う。滋賀県は三方よしというおもてなしの心を持っており、「with コロナ」とはコロナをおもてなししているとも言える。何も敵対的なものではなく、私たちはコロナと一緒なんだととらえると「with コロナ」とは、排他的に考えるのではなく、共存だと考えられる。そう考えた時に少し違和感を持ったのは、【資料 2】の中の「コロナと付き合いながらの観光」内に観光客、事業者だけでなく県民そのもの視点が欠けているのではないか。それが三方よし、「訪れてよし、迎えてよし、地域よし」という精神を考えた時に、我々自身が観光客をどうお迎えするのか考える必要を感じた。当面は、星野リゾートがマイクロツーリズムを展開しているように、県民の方向けに滋賀県を旅してもらう。そうすると滋賀県というものを県民が理解することにつながり、他都道府県の方が来られた時に迎える環境、土壌醸成につながるのではないか。三方よしこそが滋賀県ならではの基本精神であり、そこから新しい展開が生まれるのではないか。そうしたものが生まれるようなビジョンにしてほしい。少し抽象的だが以上とする。

（事務局）

○ありがとうございました。ビジョンについては現行のビジョン、基本戦略は十分コロナと付き合いながらの観光振興につながると同じように考えていた。体験や自然景観、暮らし、文化に触れるプログラムや交流人口の拡大の考え方などは、まさに「with コロナ」の時代にも通じる要素が詰め込まれている。今日ご参加いただいている審議会委員の先生方やこれまでの歴代の先生方が議論され、積み上げてこられた皆様の想いが集約されたビジョンであるとも思っているので、滋賀らしさが充分に盛り込まれていると思っている。こういったものをゼロにして見直すということではなく、これまでの大切に受け継がれてきた理念を受け止め、引き継ぎながら新しいコロナ時代のビジョンを作っていければと思っている。

ご指摘いただいた【資料 2】に関しては、観光客及び事業者の両者に防止対策の徹底を求めており、県民に関してはご指摘の通り表現が抜けていた。ただ、【資料 4】の 6 ページには、各主体の役割ということで、委員が発言されたようなことにつながるような、県民の皆様にも「観光三方よし」の理念でお迎えするような役割を記載している。

まず県民の皆様自身が滋賀県を知る機会にしてはどうか、というご意見もまさしくその通りだと思う。今現在は、クーポンを配布して「今こそ滋賀を旅しよう宿泊キャンペーン」という 7 月 15 日から始めた事業を実施している。まずは県民の皆さんにご利用いただければという形で PR を始めたものである。普段はなかなか県内の宿泊旅行をする機会は少ないが、先ほど委員も仰っていましたが、琵琶湖が真ん中にあるからこそ、行ったことのない地域もあると思う。そういったところにぜひ行っていただいて、その地域の文化、歴史に触れていただいて、また地元の新しい魅力を発見していただく。それが先ほどのおもてなしの心の醸成につながっていくような形になっていけば良いなと期待して、クーポン事業も展開している。是非皆様と連携をしながら、機運の醸成を図っていきたい。

（会長）

○だいたい時間となったが、まだご発言いただいてない方が何名かおられるので、順番に簡単で結構なので、コメントでも感想でもいただければと思う。

（委員）

○観光ボランティアガイドの立場から発言させていただく。新しい観光のきっかけにしてほしいと、政府の政策で「Go To トラベル事業」が東京を除き 7 月 22 日から開始される。コロナの関係で、観光ボランティアガイドは 3 月から 7 月迄案内は中止している。それ

以降については状況に応じて対処する方向で考えている。今までは観光公害やオーバーツーリズムで観光客が一気に押し寄せていたが、それは過去の話になった。
今、ガイドとして考えていることは、知恵と工夫で生き残るためには治療薬、ワクチンの開発が不可欠である。感染の防止を考えながら、ガイド自身が行う予防として、手洗い、消毒、マスクの徹底、ソーシャルディスタンスを取り、三密を避けることを心掛けて、ガイドをしている。これからもどうぞよろしくお願い申し上げる。

（委員）
○昨年度から委員を務めているが、参加は今回が初めてとなる。甲賀市は、NHK 連続テレビ小説スカーレットで信楽が舞台となり、コロナ禍ではあったが、ドラマが盛り上がっていくにつれて信楽や甲賀市内に大変多くのお客様に来ていただけた。放映期間中にスカーレット展を信楽の旧伝統産業会館で開催し、入館者数が対前年度比 6 倍となった。飲食店さんも土日ではお昼前から行列となった。信楽の人口は 1 万 2 千人のところ、信楽焼のタヌキは推定で 10 万匹と推測されている。私は信楽に 54 年間住んでいるが、初めて信楽焼のタヌキが品薄になったと聞いた。焼き物のタヌキが窯から出てくれば問屋さんが駆けつけてすぐに買っていくというような状況だった。甲賀市は年間 340 万人訪れるが、その約半数が信楽に立ち寄っていただいている。そのベースには、信楽焼という地場産業があっての観光ということで、他の観光地さんと毛色が違う部分もあるが、観光として甲賀市も取り組んでいる状況。
議論を聞いていて、甲賀市が考える観光の骨子の一つとして、シビックプライドの醸成に力を入れている。先ほども話になっていたが、事業者の皆様、受け手側等色んな立場があるが、市民の方、県民の方がお迎えをしていただく、そして自分も受け手側の一因だという意識を持っていただくことが、おもてなしの心の醸成につながると考えている。その施設や風景を見ることにプラスして、地域の方々と触れ合っていただくことで、その土地の良さを知っていただく。これが観光の大きな要素の 1 つだと考えている。長くなったが、そういったことを次のビジョンについてもしっかりと書き込んでいただき、オール滋賀でやっていこうという気概で、委員として作っていければと思う。

（委員）
○お店の報告になり、少し規模は小さくなるが報告する。うちの店は国道から 1 キロの山道を上がった山の中にある。店の場所は三重県境にあり関西圏や東海圏からも程よいところにあるが、公共交通機関は無く、基本は車でご来店いただくことになる。来られる方のイメージは空いているだろうということや色々条件が良かったこともあり、6 月に関して

は昨年よりも来客数が増加した。ゴールデンウィークは初めて休業しており、その休業明けの 6 月に多くのお客様に来ていただけたことはすごく嬉しかったが、同時に怖さも感じている。ウイルスは見えないので、スタッフも精神的に怖いと思っていることと、これからはマスクをしてハードな仕事での熱中症など、スタッフの体調も心配になってきている。

（委員）

○私が 1 番観光業界との結びつきが仕事上少ないので、説得力のある話はできないかもしれない。この『「健康しが」ツーリズムビジョンの前倒し』に関しては、違和感を持ったが、説明の中で 6000 万人という目標というのはやはり今の時代には合わない。それをまずは修正して、どういう風な方向性を見つけていけばよいのかということを早めに対応していくということが大事だと理解できた。社会の在り方やライフスタイルは変わっていかざるを得ない中で、それに即した観光というものがどうあるべきなのか試行錯誤しながら、腰を据えて考えていかなければならないと思う。同時に、観光を生業にされている方からすると、あまり悠長なことを言っていられない。日々の生活や来月のことを考えていかなければならないという時間軸が 2 つある中でのバランスのとり方が難しいと感じた。

日々どうなっていくか読めない中で、大きなキャンペーンに関しては難しいのではないかと感じている。また、シビックプライドという言葉が出たが、遠くへ多人数でという観光ではなく、近場へ少人数での旅行が 1 番勧めやすいと思うので、県内や近隣からの観光というのをいかに増やしていくのかが大切だと考える。

外国人向けツアーを実施しておられる事業者について、インバウンドをいつか迎える日が来ると思う。お迎えするその時に向けて、滋賀県民が改めて滋賀の良さを見直すきっかけになる時間になれば良い。滋賀県民が行ったことのない場所に行きやすい環境をどういう風に作っていくことができるのか。他の都道府県から来た人に対して、お迎えする県民が県内の他の地域を広く勧められるように、色々な経験や知識を蓄えられるようになれば良いなと感じた。

（委員）

○私自身が観光産業に携わっているわけではないので、関係する事業者の方が大変な状況に対応されているのだと勉強させていただいた。前提として、観光産業にかかわらず大きな環境変化が起こっている中でそれを活用していくしかないと考えている。私自身はどちらかといえば観光者に近い立場だが、現状で他の産業でもコロナの影響というのがど

うなっていくのか模索段階であると思う。

全体的な消費動向としては、今日の議論には異論はないが、ご近所消費のような、自分の関係のあるものや、近くの良いものを見直す動きや、応援消費の様な自分の地元や関係する大事なものは何なのか改めて考える機会になっている。そういった意味では、近隣の方や滋賀出身の方や関係する方がより観光産業にかかわってくるタイミングになってきている。私自身の話だが、小さい子供がいることもあるが、普通は夏休みには遠方の地元に帰省するところ、滋賀県内への家族旅行に変更した。そういった方が一定増えている時期だと認識している。

今日お話のあったワーケーションに関しては、今後どういった形で広まっていくのかわからない。現状での仕事環境の変化に関して、大学の授業について今期は完全にオンラインに移行しており、企業勤めの方々はリモートワークも定着している。今までは人と対面して会う機会が多かった人でも、朝から晩までパソコンに向かっている状態になっている。ゆっくりしたいときには、デジタルな環境から離れて自然に触れたいと望むので、現在の滋賀県の強みを生かせると実感している。その為に IT 環境やリモート環境を支えるような環境が必要。是非環境の変化を踏まえた上で滋賀の良さを見直す機会になったらと思う。

（会長）

○終了時間が迫ってきたので、議題については以上とさせていただく。最後に、オブザーバーの方々から一言ずつご意見をいただきたい。

（オブザーバー）

○いろいろなお話を聞かせていただいた。旅行業協会を含めて、旅行産業はいかに安全安心を確保するのかというところに尽きると思う。「Go To トラベル事業」のいろんな問題についても、行っていただく国民の皆様が安心して行けるという気持ちをいかに作っていくかだと思う。そんな気持ちになれば旅行もいろんな所に行っていただけるのではないかと思う。滋賀県の方へも、安心安全であるということ、来てくださいという PR をお願いしたい。先ほどからあった、「今こそ滋賀を旅しよう宿泊キャンペーン」について 7 月 15 日から始まっているが、ここにおられる委員の方もあまり知っておられないのではないかと思う。まだまだ告知が足りていないので徹底してやっていただきたい。

他の都道府県では、北海道で道民割が始まっておりすでに第 3 弾になり、函館やいろんな宿泊施設で 1 万円の宿泊補助を行っている。今朝もテレビで見たが、函館の旅館は先月で対前年度比 80%、来月に至っては 100%を超えている旅館が増えている。滋賀県も

今後色んな補助事業をやっていただくと思うが、いろんな形で旅行業界含めてPRを前面に出して、どんどん滋賀県に来ていただくようにすることが次につながると思う。

（オブザーバー）

○今の話を聞いて、「もっとビューローがんばれ」という激励と受け止めたので頑張ってやっていきたい。ビューローには、県施策の成果が出るように実行していく役割があると考えており、4～6 月の補正予算ではかなりの予算、事業を受けているところ。県民の皆さんへの滋賀県の魅力の発信、滋賀県に宿泊していただけるような、クーポン事業を始めしっかりと宿泊していただけるようにしっかりと呼び掛けていきたい。

県外からのお客様の滋賀県への誘客については、厳しくなってきている。事業者の皆さん方には、「もしサポ滋賀」の導入を進めながら滋賀県の観光事業者の方、宿泊施設の方が安心安全に頑張っていただいているということを県外に向けてしっかりとPRしていかなければならないと考えている。

インバウンドに関しては、こんな状況でなかなか対応できないが、今できることをしっかりやろうと考えている。日本に住んでいる発信力の高い方を滋賀県に呼んで、取材していただき、外国に向けて発信していただいている。

全体として、県の補正予算を受けて観光事業者や県内の事業者の方の為にしっかりと頑張っていきたい。

（会長）

○本日は皆様から多岐にわたるご意見をいただいた。県においては、本日の議論を参考にして、これからの観光施策を検討し、効果的な事業展開をされるようお願いしたい。それでは進行を事務局に返したい。

○ 中山理事挨拶

＜閉会＞